

# 伝統的中国医学テキストの変遷についての検討 －傷寒と寒石散（乳石発動）を題材に－

牧角和宏

牧角内科クリニック院長

## 1) 傷寒概念の変遷：傷寒の病態変化に伴う治法の変化

『宋板傷寒論』は、隋唐・五代十国を経て、散逸していた「傷寒論」を宋代に再編集した文献であり、過去の姿を正確に復元したものではない。傷寒六經概念の時代的な変遷について、①陽病附子発汗が行なわれなくなり、陰病附子温裏が追記された事情。②陽明病に下法が加わったいきさつ。に関して論じる。

①附子は古来、傷寒（「狭義傷寒」）発症初期（太陽病）の発汗剤（瀉剤）として用いられていた（『千金方』、『外臺祕要』 - 以下『外臺』 - 、『太平聖惠方』 - 以下『聖惠』 - ）。（麻黃附子細辛湯は正調古方における太陽病表證の処方と考えられる。）気候の変動に伴い、傷寒（感染性熱性疾患）の病態が温病・時氣病などの「広義傷寒」に変化し、発汗過多による副作用から附子による発汗治療が忌避されるようになった経緯が『千金方』『外臺』『聖惠』『宋板傷寒論』それぞれの「傷寒例」の記述に反映されている。

また、「陰病裏実の下法・裏虚の温裏」として下法と温裏法が両論併記され（『聖惠』8）、附子剤の陰病への配置転換が行なわれた。

②一方、容易に熱化する性質を有する「広義傷寒」においては、陽明病の段階で燥熱便秘に承氣湯が用いられるようになった。発汗法が主体であった陽明病治療が、承氣湯下法に変化し、結果として「太陽病（表）→少陽病（半表半裏）→陽明病（裏）」という、宋以前とは異なる認識が新校正以降に出現した。

『宋板傷寒論』三陰三陽篇は、『素問』熱論流の「陽病発汗・陰病下法」に、陽病の下法、陰病の温裏法などが入り混じった「ハイブリッド傷寒論」であると考えるのが妥当である。宋以前の傷寒治療（陽病発汗陰病吐下）を守備範囲に加え、『宋板傷寒論』およびその後発本の特殊性を理解することによって、さらに広範で精緻な臨床運用が展開される可能性が示唆される。

## 2) 乳石発動への対応の変遷：治療不可能な病状への挑戦記録

乳石発動（鍾乳石、石英などの服用による副作用：放射線障害と考えられる）という不治の病態に対し、様々な試行錯誤が試みられてきたことが推測される（『外臺』24、37、38）。

『外臺』24の「發背方四十一首」42条文中、33条が『新雕孫真人千金方』『聖惠』『千金翼方』『医心方』などの宋以前文献に対応。『外臺』37も、処方内容記載条文101条中、大半は宋以前条文の引用と確認した。

一方、『外臺』38は全18編、197条において、宋以前文献としては『聖惠』54条が最多。宋以前のいずれにも対応しない条文が85条存在。そして、北宋成立以後100年間の知見の集大成とされる『聖濟總錄』が133条を引用している。『聖濟總錄』編纂者が、宋改『外臺』記載条文を宋改時点の新知見の書き込みと認識し、掲載したことが伺える。

『外臺』が宋改において大きく書き換えられたことが『聖惠』→宋改『外臺』→『聖濟總錄』という、宋初期から末期をまたぐ資料の比較検討によって明らかになった。

### 【まとめ】

『宋板傷寒論』『外臺』で例示されるように、宋改文書を取り扱うには細心の注意が必要であることが示唆される。